

# 公立学校の英語教育における 外国語指導助手(ALT)の在り方及び活用方法 ——英語圏と非英語圏出身の元外国語指導助手の 視点からの一考察——

天 木 勇 樹

## 1 はじめに

### 1.1 研究の背景

世界を舞台に活躍できるグローバル人材を育成することを目的として、2013年に日本政府が公表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(文部科学省 2013)のもとで、英語による実践的なコミュニケーション能力の育成と異文化理解教育を促進するための英語教育改革が進められている。その中で、小学校・中学校・高等学校での教育を通じ、外国人教員や外国語指導助手(Assistant Language Teacher、以下 ALT とする)の効果的な活用が生徒の英語の使用機会の拡充と英語を学ぶ動機の上昇を図る上で重要な取り組みの一つと考えられている。2020年4月からは小学校3年生から英語が必修科目となり、小学校3年生と4年生では外国語の授業時間数は年間35単位(1単位45分)、小学校5年生と6年生は外国語の授業時間数は年間70単位(1単位45分)である。小学校学習指導要領によれば、英語授業の指導計画を作成する上では、「学級担任の教師又は外国語を担当する教師が指導計画を作成し、授業を実施するに当たっては、ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材などの協力を得る等、指導体制の充実を図るとともに、指導方法の工夫を行うこと」(文部科学省 2017, p.177)と

記述がある。実践的なコミュニケーション力向上を図るために、全国の各学校における英語教育の指導体制の強化が求められているが、「20年度を目前にALTの確保は各自治体にとって重要な課題となっている」（『日本経済新聞』2019.3.27 電子版）という指摘がある。ALTを活用した英語授業の実施が全国の学校で求められている一方で、新型コロナウイルス感染症の影響でALTの確保がさらに難しくなっているため、今後も引き続きALTの確保やALTを補うための人材の確保が課題である。このような状況下で、公立学校の英語授業におけるALTの在り方と効果的な活用方法を検討する必要があると考える。

## 1.2 外国語指導助手（ALT）の活用状況

英語による実践的なコミュニケーション能力向上のための英語授業の充実、小学校・中学校・高等学校では重要な課題である。文部科学省がまとめた令和元年度「英語教育実践状況調査」結果によれば、ALT等の活用人数は2018年度と比較すると588名増加しており、ALTを活用した授業時間数の割合は、小学校ほど高いという結果が示された。

一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）が文部科学省、外務省、及び総務省と協力し、「外国語教育の充実と地域レベルの国際交流の進展を図ることを通し、日本と諸外国との相互理解の増進と日本の地域の国際化の推進を目的」として、1987年から語学指導等を行う外国青年招致事業（The Japan Exchange and Teaching Program；以下、JETプログラムとする）を実施し、多くのALTを招致している。JETプログラムには、ALTの他に、国際交流員（CIR：Coordinator for International Relations）とスポーツ国際交流員（SEA：Sports Exchange Advisor）の3つの職種がある。CLAIRによれば、2019年度は、世界57か国から5,761名の外国人がJETプログラムに参加し、2018年度よりも230名ほど多く参加しており、ALTを含むJETプログラム参加者は増加傾向にある。文部科学省がまとめた令和元年度「英語教育実施状況調査」結果によると、ALTの雇用形態の割合は、以下の表1の通りである。中学校と高等学校では、JETプログラムからのALTが最も多く、高等学校では小学校の3倍のALTがJETプログラムのALTであるこ

表1 外国語指導助手（ALT）等の活用人数（小・中・高等学校）

| 校種／形態 | JET<br>プログラム      | 直接任用              | 労働者<br>派遣契約       | 請負契約             | その他               |
|-------|-------------------|-------------------|-------------------|------------------|-------------------|
| 小学校   | 2,651人<br>(19.9%) | 2,639人<br>(19.8%) | 2,789人<br>(20.9%) | 1,186人<br>(8.9%) | 4,061人<br>(30.5%) |
| 中学校   | 2,771人<br>(33.8%) | 1,562人<br>(19.0%) | 2,201人<br>(26.8%) | 856人<br>(10.4%)  | 856人<br>(9.9%)    |
| 高等学校  | 1,707人<br>(61.3%) | 478人<br>(17.2%)   | 343人<br>(12.3%)   | 108人<br>(3.9%)   | 147人<br>(5.3%)    |

（文部科学省の令和元年度「英語教育実施状況調査」概要をもとに加工した表である。）

※「小学校」「中学校」「高等学校」の欄は、それぞれ他の学校種を兼務している場合を含む人数。

※「その他」は、留学生や英語が堪能な地域人材（日本人を含む。）の人数。

表2 ALTを授業で活用する時数の割合の分布

| 具体的な活用の内容                          | 小学校   | 中学校   | 高等学校  |
|------------------------------------|-------|-------|-------|
| 教師とのやり取りを児童生徒に示す／<br>やり取り・発表のモデル提示 | 98.7% | 98.6% | 93.8% |
| パフォーマンステスト等の補助                     | 63.9% | 94.6% | 79.5% |
| 児童生徒のやり取りの相手                       | 98.6% | 98.6% | 93.9% |
| 発音のモデル・発音指導                        | 98.7% | 98.1% | 92.5% |
| 児童生徒の発言や作文等に対するコメント・フィードバック        | 85.7% | 96.9% | 91.3% |
| 外国語（英語）の授業外での児童生徒との交流              | 82.2% | 85.3% | 79.7% |

（文部科学省の令和元年度「英語教育実施状況調査」概要をもとに加工した表である。）

とが明らかになった。

また、文部科学省が令和元年度「英語教育実施状況調査」結果をもとにまとめた学年別のALTを活用した学校・学科の割合は以下の表2の通りである。小学校では、「パフォーマンステスト等の補助」「児童生徒の発言や作文等に対するコメント・フィードバック」「外国語（英語）の授業外での児童生徒との交流」の3つの活用内容項目が、中学校や高等学校の活用内容に比べるとその割合が低く、特に「パフォーマンステスト等の補助」では、6割程度にとどまっている。中学校では、「外国語（英語）の授業外での児童生徒との交流」以外の活用内容項目では、9割以上の活用である。高等学校では、「パフォーマンステスト等の補助」「外国語（英語）の授業外での児童生徒との交流」の活用が8割にとどまる。小学生や中学生は、給食や昼休み、

放課後の時間帯に ALT と英語で触れ合い、交流を深める機会が多い一方で、高校生は授業時間外に交流する機会が比較的少ないことが推測できる。

### 1.3 研究の目的

ALT の活用が増加傾向にある中、労働者派遣契約や請負派遣等の派遣形態の違いから、契約上、派遣先の学校での ALT の扱いが異なる場合も考えられるが、特に小学校では 3 年生から必修科目の英語授業が 2020 年度から開始となり、英語を専門とする小学校教員がまだ少ないため、今後更なる ALT の需要が高まると推測できる。本研究では、英語圏出身の元 ALT および非英語圏出身の元 ALT がそれぞれの視点から ALT としての勤務経験を振り返り、日本人教員と ALT との関わり度合い、ALT としての仕事と生活の満足度の高さ、英語授業における ALT の在り方と活用方法の 3 つの点から考察する。客観的な立場にいる元 ALT の意見をもとに調査・分析し、今後の公立学校における ALT の在り方と ALT の効果的な活用方法についての具体的な施策を構築する必要があると考える。

## 2 調査概要

### 2.1 調査方法 (量的調査)

本調査では、過去に JET プログラムに ALT として参加した経験のある外国人に調査協力を依頼し、オンラインによるアンケート調査を実施した。現在の公立学校では、JET プログラムからの ALT 以外にも民間会社からの労働者派遣形態で働く ALT が勤務している。業務請負形態の場合、日本人の英語教員からの直接的な指示や打ち合わせを行った場合、派遣先と労働者の間に指揮命令関係が生じてしまい、偽装請負として違法となるとの指摘がある (奥貫・カーレット 2012, p.19)。そのため、日本人の英語教員が授業内容を ALT に指示して授業を行うことなどを躊躇する日本人教員もいる (Tsuido et al. 2012, p.50; 狩野・尾関 2018, p.124)。本調査では、日本人教員とのチーム・ティーチング (Team Teaching) や授業の打合せのために、

ALTが日本人教員と関わった度合いに関する質問項目がアンケート調査票に含まれるため、業務請負形態のALTは含まず、JETプログラムからのALT経験者のみを対象とした。アンケート調査票の質問項目を以下に示す。問1の基本データ以外は、5段階での回答選択（とてもそう思う、ややそう思う、どちらとも言えない、あまりそう思わない、全くそう思わない）を求めた。

【問1】 基本データ（出身国・地域、勤務年数）

【問2】 勤務先の公立学校（小学校・中学校・高等学校）の授業前の打合せや授業中の指示、時間外の日本人教員との関わり度合いが高かったか。

【問3】 ALTとしての公立学校（小学校・中学校・高等学校）での仕事や生活に満足だったか。

問1を聞いた理由としては、英語圏出身者と非英語圏出身者を2つのグループに分けるため、質問票に出身国・地域を含めた。英語が母国語の英語圏出身の元ALTと比べ、非英語圏出身者は、母国で英語を第二外国語として学んでいる。日本の英語教育についても、英語圏出身者とは異なる視点で日本の英語教育に携わり、ALTとして勤務していたと推測する。また、ALTは1年の任用期間であるが、最長5年間、ALTとしての滞在が認められている中で、どの程度の期間をALTとして勤務した経験があるのかを把握するため、勤務年数を基本データに加えた。

また、公立学校がALTをどのように扱い、ALTとの英語授業におけるティーム・ティーチングのための打合せや授業中の指示、授業時間外の日本人教員との関わり度合いなどの仕事と生活の満足度の高さの関連を明らかにするため、問2の設問を設けた。

問3では、母国とは異なる職場環境の中で、ALTとして勤務生活を送ったことについて、どの程度満足していたのか回答を求めた。

## 2.2 調査方法（質的調査）

アンケート調査票の質問項目に以下の自由記述欄を設け、英語授業における補助業務の経験とALTの在り方や活用方法について率直な意見を求めた。

【問4】 勤務先の公立学校の授業中や授業時間外の日本人教員との関わりについて、特に印象に残っていることは何か。

【問 5】 ALT としての公立学校での仕事と生活の満足度の高さについて、特に印象に残っていることは何か。

【問 6】 ALT として勤務した経験を振り返り、公立学校の英語授業における ALT の在り方と活用方法についてどう思うか。

まず、問 4 を設定した理由は、英語授業で補助的な立場にある ALT は一人で授業を教えることができないため、日本人教員が ALT を効果的に活用するためには、日本人教員との関わりが必要不可欠となるため、質問項目に加えた。次に、問 5 については、不慣れな地域で暮らす ALT が、勤務生活を通じて、赴任先の学校の教員や生徒、周囲の人々との交流を通じ、ALT としての仕事と生活の満足度を知ることとも今後の ALT の効果的な活用方法を考える上で重要であるため、質問項目とした。最後の問 6 では、客観的な立場であった元 ALT 教員が考える ALT の在り方と活用方法についての意見を分析し、今後の ALT の在り方を考えるため、質問項目に追加した。

## 3 調査結果

### 3.1 回答者の概要

本調査の有効回答数は、全体で 306 件であった。アメリカやカナダなどの英語圏出身の元 ALT の有効回答数の割合は全体の 76.8% を占め、ドイツやフランス等の非英語圏出身の元 ALT の割合は全体の 23.2% である。結果的に英語圏出身の元 ALT 経験者が多くなったが、毎年 JET プログラムに参加する ALT の出身国・地域はアメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ等の英語圏が最も多いため、意図的に対象を絞ったものではない。

ALT としての勤務年数については、英語圏と非英語圏出身の 2 つのグループに分けて集計した結果が表 3 である。英語圏出身の元 ALT では、2 年間で 43.0% と最も多く、次に 1 年間で 36.6% であった。非英語圏出身の元 ALT も同様に 2 年間で 33.8% と最も多く、次に 1 年間で 28.2% であった。英語圏出身の元 ALT に比べ、非英語圏出身の元 ALT は 3 年間勤務した人も

表3 ALTとしての勤務年数

| 出身者別        | 勤務年数          |                |               |              | 合計            |
|-------------|---------------|----------------|---------------|--------------|---------------|
|             | 1年間           | 2年間            | 3年間           | 4年間          |               |
| 英語圏出身の元ALT  | 86<br>(36.6%) | 101<br>(43.0%) | 38<br>(16.2%) | 10<br>(4.3%) | 235<br>(100%) |
| 非英語圏出身の元ALT | 20<br>(28.2%) | 24<br>(33.8%)  | 18<br>(25.4%) | 9<br>(12.7%) | 71<br>(100%)  |

表4 日本人教員との授業中・授業時間外の関わり度合い

| 英語圏出身の元ALT |      |      |       | 非英語圏出身の元ALT |      |      |       |
|------------|------|------|-------|-------------|------|------|-------|
| 度数         | 平均値  | 標準偏差 | 変動係数  | 度数          | 平均値  | 標準偏差 | 変動係数  |
| 235        | 2.86 | 1.01 | 35.31 | 71          | 2.99 | 1.05 | 35.12 |

多いことがわかる。勤務年数の長さが、ALTとしての仕事や生活の満足度や日本人教員との関わり度合いと関連する可能性がある。

### 3.2 日本人教員との授業・授業時間外の関わり度合い（量的調査結果）

ALTが日本人教員との授業前の打合せや授業中の指示、授業時間外の日本人教員との関わり度合いについて、英語圏出身と非英語圏出身の2つのグループに分けて分析した結果が表4である。表4では、ALTとしての勤務経験を振り返り、日本人教員とどの程度関わったと思うのかを「とてもそう思う」を1点、「ややそう思う」を2点、「どちらとも言えない」を3点、「あまりそう思わない」を4点、「全くそう思わない」を5点とし、平均値と変動係数を算出した。英語圏出身の元ALTは平均値が非英語圏の元ALTとほぼ同じ値であり、「どちらとも言えない」と回答した人が多く、日本人教員との授業前の打合せや授業時間外の関わり度合いについては、大きな違いは示されなかった。

### 3.3 日本人教員との授業・授業時間外の関わり度合い（質的調査結果）

英語圏出身の元ALT235名、非英語圏出身の元ALT71名の授業前の打合せ、授業中の指示、授業時間外での日本人教員との交流に関しての自由記

述回答の内容を計量テキスト分析（テキストマイニング）ソフトである KH coder（樋口 2020）を用いて言語的な分析を行った。自由記述回答の全ての内容をテキスト化し、頻出語を高い順に自動的に抽出した後、共起関係进行分析し、共起の程度が強い語を線で結び、共起ネットワークを作成した。まず、英語圏出身の元 ALT による自由記述回答の内容をテキストマイニングによる分析を行った結果を図 1 に示す。図 1 の共起ネットワークから中心性が最も高かった語は「teacher」であり、「school」「ask」「help」「class」「student」「seek」と共起関係にある。自由記述回答の内容では、授業時間外での日本人教員との交流や関わりに関する否定的なコメント内容が多かった。さらに「busy」は「too」「experience」と共起関係にあることから、日本人教員の多忙さが原因で、ALT との希薄は関係になっていることが推測できる。分析の結果、大きく分けて、2つの記述のまとまりが見出された。

一つ目の記述のまとまりは、「日本人教員が多忙のため、授業時間外で交流することは稀であり、アドバイスを受けることも難しかったこと」である。英語圏出身の元 ALT の挙げたコメントの一部は下記の通りである。

- *Seeking help to improve English education was a low priority at my schools. The teachers were too busy with other school-related activities and when Team Taught training was offered about 90% of the time, they refused it or said they were too busy to participate. There was little incentive nor motivation to seek help either from me.*
- *Often, the teachers appeared too busy in the staff room or not interested in speaking English so I was afraid to approach them when I needed help. I think maybe people thought I would understand what was going on at school because I spoke some Japanese when I arrived, but I was often confused about the schedule etc.*

二つ目の記述のまとまりは、「勤務する学校により日本人教員の ALT に対する接し方が異なること」であり、以下、元 ALT からの具体的なコメント



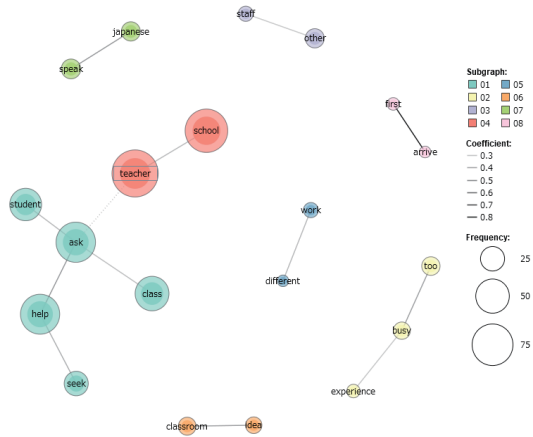


図1 日本人教員とALTの関わり度合いに関する共起ネットワーク（英語圏出身の元ALT）

である。

• *There was that sort of stereotype of “I have no time outside of the walk to class to talk to the ALT.” Luckily, we had exchanged contact information, so they did take a step to ask questions and opinions outside of school. Not to mention a lot more of the schools have got me marking notebooks, working in extra elective classes, making English boards, etc. I've also found myself talking to the teachers to eat school lunch with different classes every week and to help out with soccer club after school.*

• *I worked at a different school every day. There was no time to meet with each homeroom teacher in addition to planning and teaching 3-6 classes by myself. Even if I were able to meet with a teacher, I wouldn't feel comfortable asking for help. At most schools, no one could speak English. My Japanese was very poor, so it was difficult to communicate. During class, some homeroom teachers were wonderful. Some, however, stood in the back of the room and watch. They*

*didn't say hello to me, they didn't keep the students seated and quiet. Once I asked a teacher who was grading papers at her desk to help with the lesson, and she ignored me.*

次に、非英語圏出身の元 ALT71 名に対して、共起ネットワークによるテキストマイニングを使い、自由記述回答の内容を分析した結果を図 2 に示す。まず、図 2 の共起ネットワークから中心性が高かった語は、英語圏出身の元 ALT の結果と同様に「teacher」であり、「class」「ask」「English」「speak」と共起関係にある。また、「need」「really」「helpful」「take」「teachers」「ALT」が共起関係にあり、英語圏出身の元 ALT の自由記述回答の内容とは異なり、日本人教員との授業時間や授業時間外でのコミュニケーションが希薄であったと感じた元 ALT が少なかったことがわかる。分析の結果、大きく分けて、2つの記述のまとまりが見出された。

一つ目の記述のまとまりは、「日本人教員は親切で協力的であったこと」であり、非英語圏出身の元 ALT が挙げた具体的なコメントは以下の通りである。

• *My schools were excellent, all around. Initially they took me around to my house, the town, and did their best to make sure all my problems were taken care of. They did their best to inform me of what was going on in school, but also expected me to figure some things out for myself. Any problems they had with me were handled with sensitivity and professionalism. My co-workers were also happy to invite me to other school activity and help me out with whatever I needed.*

• *I was completely happy with my job. I worked 10-12 hours a day but I loved it. I wouldn't trade it for anything. I had worked very hard to develop the English program at my schools and to get to know the staff members. When I needed help, I had learned to time my requests well so that they were well-received and so teachers actually had time to help me.*

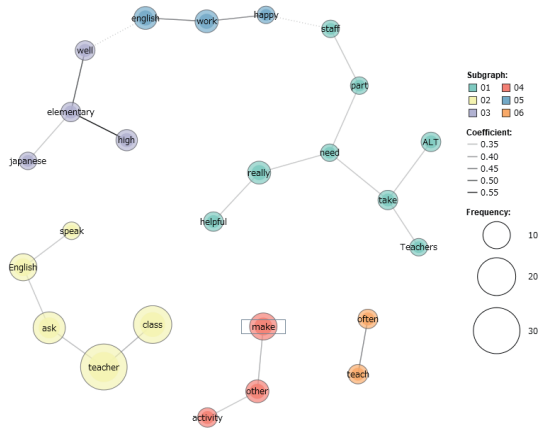


図2 日本人教員とALTの関わり度合いに関する共起ネットワーク（非英語圏出身の元ALT）

二つ目の記述のまとめりは、「日本人教員と協力して授業や課外活動を行うことができたこと」であり、元ALTが挙げたコメントは以下のとおりである。日本人教員との共同作業ができていた元ALTが多いことが推測できる。

• *The teachers welcomed me inside their classes, and they knew how to incorporate me into their lessons. The teachers sought my help outside of class by asking me questions in regards to pronunciation and grammar and by having me correct the students' writings. And, they had me help with the English-Speaking Society Club.*

• *Teachers were usually willing to assist you in whatever way they could, outside of class. In class most teachers asked for help to varying degree. Some made me very involved while others used me as a human tape recorder and little more. Very often, apart from English teachers, very few other teachers took the trouble to even say hello.*

表5 ALTとしての勤務における労働と生活満足度

| 英語圏出身の元 ALT |      |      |       | 非英語圏出身の元 ALT |      |      |       |
|-------------|------|------|-------|--------------|------|------|-------|
| 度数          | 平均値  | 標準偏差 | 変動係数  | 度数           | 平均値  | 標準偏差 | 変動係数  |
| 235         | 2.22 | 1.10 | 49.55 | 71           | 2.30 | 1.09 | 47.39 |

### 3.4 ALTとしての仕事と生活の満足度の高さ（量的調査結果）

次に、ALTとしての勤務生活を振り返り、ALTとしての仕事と生活の満足度の高さについて、各グループに分けて分析した結果が表5である。表5では、元ALTがどの程度満足だったかを「とてもそう思う」を1点、「ややそう思う」を2点、「どちらとも言えない」を3点、「あまりそう思わない」を4点、「全くそう思わない」を5点とし、平均値と変動係数を算出した。

仕事と生活の満足度の高さの面では、英語圏出身と非英語圏出身の両グループ共に平均値が小さく、ALTとしての仕事や生活には、おおむね満足していたことが明らかになった。ALTとして母国とは全く異なる職場環境で勤務することに不安を感じるALTもおそらくいた可能性もあるが、不満足だったと感じている元ALTは少ないことがわかる。

### 3.5 ALTとしての仕事と生活の満足度の高さ（質的調査結果）

英語圏出身の元ALT235名、非英語圏出身の元ALT71名に対して、ALTとしての日本での生活や学校での仕事に関して、共起ネットワークによるテキストマイニングを使い、質問票にある自由記述回答内容の分析を行った結果を図3及び図4に示す。まず、図3の共起ネットワークから中心性が高かった語は「student」であり、「school」「very」「get」「learn」「they」と共起関係にある。ALTとしての生活において、日本人の生徒たちとの交流が、満足度を高める要因の一つと推測できる。また、その他に中心性が高かった語は「not」であり、「Japanese」「make」「friend」「job」「people」「opportunity」が共起関係にある。日本人教員との交流や日本人の友人を作る機会を得ることの難しさがあったことが推測される。英語圏出身の元ALTによる記述回答内容の分析の結果、大きく分けて、3つの記述のまとまりが見出された。

一つ目の記述のまとまりは、「慣れない土地での教員生活に不安が生じた

が、周りの人がとても親切だったため、充実した生活を送ることができたこと」であり、元ALTの具体的なコメントは以下の通りである。日本人教員が多忙であったために、互いの関係が希薄になったというコメントが見られなかった。

• *It was very difficult for me to move to a new country and start a new job at the same time. I often felt lonely being the only foreigner in my town, and I felt like I didn't fit in at school. I wasn't told what was expected of me, nor was I given a performance review, so I was often stressed about work. I took my job way too seriously. However, the support network of JET and other ALTs in the area really helped me adjust. Sometimes it was stressful to be seen as an outsider after living here for almost 2 years, and I got frustrated when people stared and yelled "gaijin da!," but overall I got to know a side of Japan that I could never see if I was just a tourist and I would never forget all the people who had been a part of my life.*

• *It was an amazing opportunity to connect with the Japanese people, learn Japanese and help students learn English and prepare for university. I felt accomplished in my job as well as happy to have met and exchanged ideas with many different kinds of people.*

二つ目の記述のまとめりは、「職場では、孤独を感じることもあったが、親切な日本人教員もいたため、乗り切ることができた」という内容である。英語を専門としない日本人教員の多くが、英語を話すことが難しい可能性があるため、日本語が十分に話せないALTと会話することは難しい場合がある。元ALTが記述した具体的なコメントは以下の通りである。

• *I really enjoyed teaching, but the days when I was given no lessons to teach and had no preparation work to do were very boring, especially as many of the teachers were reluctant to speak to me at junior high; the elementary teachers*

*were much more friendly.*

• *Overall, it was an amazing opportunity. However, the job was very monotonous, and difficult at times to make friends at the office. The teachers were very busy, so sometimes I was lonely. Most of the teachers were friendly, but seemingly shy/busy.*

三つ目の記述のまとめは、「ALTとして日本の学校で働くことに対し、理解することができない部分もあった」という内容である。各学校によっても職場の雰囲気異なる場合があり、毎週、いくつもの小中学校や高等学校を掛け持ちで回るALTにとっては、それぞれの職場の雰囲気に慣れることはとても難しいことであることが推測できる。元ALTが記述した具体的なコメントは以下の通りである。

• *Japan was a nice place, but life as an ALT often felt disconnected and bizarre. The people I worked with seemed to forget that I moved 7,000 miles from my home specifically to do this job. ALTs were not utilized to their fullest potential and seemed to be a cross between a birthday clown and an excuse for internationalization.*

• *The primary complaint among ALTs was the general lack of utilization of us by our employers. We felt we could do so much more with our time while at the schools. Instead, we sit around and read books and spent hours on the internet. I think this was a primary difference between Japanese work systems vs. the American system. Americans do not want to be in an office unless they are actually working. Japanese people seem to relish putting in as long of hours as possible, as if it is some sort of contest, regardless of whether they are actually being productive or not.*

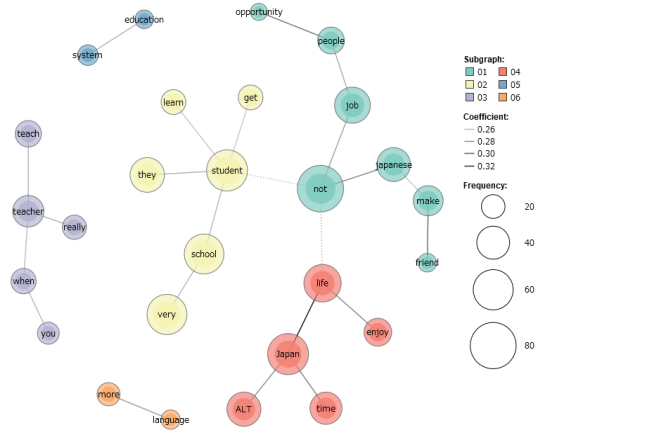


図3 ALTの仕事と生活の満足度の高さに関する共起ネットワーク（英語圏出身）

次に、非英語圏出身の元ALTの記述内容に関するテキストマイニングの分析の結果、図4の共起ネットワークから最も中心性が高かった語は「ALT」であり、「life」「Japan」「job」「teacher」「work」「teach」と共起関係にある。多くの元ALTが、英語教員として小中学校や高等学校の生徒に英語を教えることに充実感を得ることができ、ALTとして日本での生活に満足感を得ていることが推測できる。図4から、大きく分けて、3つの記述のまとまりが見出され、記述のまとまりの内容は、英語圏出身の元ALTとは異なることが明らかになった。

一つ目の記述のまとまりは、「ALTとしての仕事に対して充実感を得ていること」であり、元ALTの具体的なコメントの一部は以下の通りである。赴任地域の人々との交流や職場の日本人教員との関係が良好だったために、充実した生活を過ごした元ALTが非母国語出身者の中には多かったことがわかる。

• *I think I really lucked out. I think being placed in a fairly rural environment had a great deal to do with my satisfaction. The people of my host city were*

*incredibly warm and eager to include me in their lives. Not having any teaching experience prior to joining JET, the first 6 months were very hard as I adjusted to my new life and job. But after that initial period, I felt I was able to develop - with the help of my fellow teachers and school administrators - to a point where I was able to bring a lot of tangible benefit to my students in team lessons. Of course there were some hard situations, but overall, I was very satisfied with my life in Japan as an ALT.*

• *Frankly, if I were to rate my job only, I would have selected 'satisfied.' I felt I could be used more effectively at work by some of my teachers. I had a great relationship with most of them and I felt satisfied with my work life. My life outside of work in Japan was very rewarding. On that basis I selected 'Very Satisfied.'*

二つ目の記述のまとめりは、「生徒たちとの交流と多くの人々との出会いに満足していること」であり、元ALTが挙げたコメントは以下の通りである。英語教育を通じた日本人の生徒たちとの触れ合いが特に印象に強く残っていることがわかる。

• *I loved the students and the job. The frustrating times were far outweighed by happy memories. It was the best four years of my life, thanks a lot to the great people I had worked with.*

• *I loved the time I spent teaching my students, but even more, I loved the time I spent interacting with them outside the class and on the playground. I believe that I was able to break down some cultural stereotypes and hopefully broadened their perception of the world outside of Japan.*

三つ目の記述のまとめりは、「日本人が持っている外国人に対する偏見やステレオタイプをなくすため、ALTが日本人の生徒らにその理解を深める機



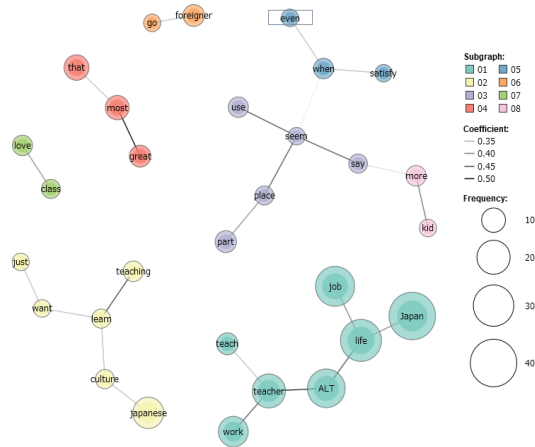


図4 ALTの仕事と生活の満足度の高さに関する共起ネットワーク（非英語圏出身）

会を提供することができた」という内容である。元ALTの具体的な内容は以下の通りである。

• *I used the extra time available to me to achieve goals that I had. I learnt about a culture that was totally different from mine and I had developed an even greater appreciation for diversity. While, I didn't think I contributed whole heartedly to the actual learning process for students, I thought I had managed to reduce a bit of the negative stereotype associated with people from my country and people of my complexion.*

• *The job experience was very satisfactory in terms of culture exchange and learning to act according to a Japanese sense of professionalism which was very high. The community life was also exciting but it was difficult adjusting and feeling not so much as a foreigner. I also felt there had been a lot of opportunity for me to absorb the culture of the Japanese people at a grassroots level.*

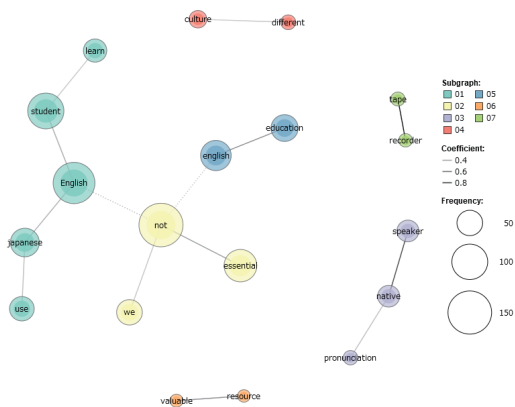


図5 ALTの在り方と活用方法に関する共起ネットワーク（英語圏出身のALT）

### 3.5 英語教育におけるALTの在り方と活用方法（質的調査結果）

元ALTに対して、公立学校（小学校・中学校・高等学校）の英語授業におけるALTの在り方と活用方法に関して、共起ネットワークによるテキストマイニングを使い、英語圏出身の元ALT235名、非英語圏出身の元ALT71名の自由記述回答内容の分析を行った結果を図5及び図6に示す。まず、英語圏出身の元ALTの自由記述回答の内容を分析した結果、図5の共起ネットワークから中心性が高かった語は「not」であり、「essential」「we」と共起関係にある。その他に中心性が高かった語は「English」であり、「student」「learn」「Japanese」「use」と共起関係にある。英語教育におけるALTの在り方と活用方法については、肯定的な考え持つ元ALTと否定的な考えを持つ元ALTがいることが示された。記述回答内容の分析の結果、大きく分けて、4つの記述のまとまりが見出された。

一つ目の記述のまとまりは、「英語の教育現場にネイティブのALTが必要である」という内容であり、元ALTが挙げたコメントは以下の通りである。

• *Students get to experience internationalization. They get the chance to actually to talk with a native English speaker and practice a language that*

*their tests make so difficult.*

*• I think it's essential to have native speakers check the English that the teachers bring into the classroom. I think in general, native English speakers who speak Japanese would make better teachers in the classroom and no ALT would be necessary at all.*

二つ目の記述のまとめりは、「ALT は、英語教育を通じ、英語を教えるだけでなく、異文化理解教育の促進のために必要である」という内容であり、元 ALT が挙げたコメントは以下の通りである。

*• The JET program itself is about teaching English and also internationalizing students. I think that ALTs are an important part of English education in Japan as it not only allows Japanese students to hear and learn from a native-speaker of English, but it also introduces students to an English-speaking person with a different culture, background and country.*

*• My location was remote and it gave the students a chance, not only to study English with a native speaker, but to learn about an entirely different culture. I believe many ALTs have great ideas and are great assets to the program.*

三つ目の記述のまとめりは、「ALT を人間テープレコーダーとして扱うならば、ALT は不要である」という内容であり、元 ALT が挙げたコメントは以下の通りである。

*• I think that ALTs can help improve English education in Japanese schools IF they are seen as a valuable resource. If they are just used as tape recorders, I think it is wasteful. Simply being foreign and sitting at a desk does nothing to help internationalize people!*

• *I believe that they can be, but only if they are utilized properly. Unfortunately, some Japanese schools, and Japanese teachers of English in particular didn't know how to really integrate the ALTs into English lessons, and thus sometimes, the ALT can be rendered as little more than a human tape recorder.*

四つ目の記述のまともりは、「英語授業における ALT の役割が明確ではないため、ALT は英語教育現場に必要なではない」という内容であり、元 ALT が挙げたコメントは以下の通りである。

• *ALTs are not essential. Overall , the presence of ALTs in the classroom, while sometimes a welcome distraction for students because the actual content of class instruction is mind-numbingly dull, serves to simply reinforce the stereotype that English is a wholly alien concept that Japanese society can and should keep at arm's length while paying lip service to in order to appear more globalized in the eyes of the international community than it actually is .*

• *Considering the way in which English education exists today in Japan, ALTs are not essential to English education. For the most part, ALTs come to Japan for a limited period of time 1-3 years on average, and return home. Japan would save money and time sending graduates to English speaking countries only to permanently return home to teach English. If Japan wants to utilize ALTs to their full potential, they must also reevaluate their approach to English education.*

次に、非英語圏出身の元 ALT の自由記述回答の内容に関するテキストマイニングの結果、図 6 の共起ネットワークから、中心性が高かった語は「not」であり、「English」「student」「do」と共起関係がある。さらに、「not」は「ALT」「essential」と「English」「education」とも共起関係がある。英語圏出身の元 ALT の自由記述回答の内容と同様に、ALT の在り方と活用方法について肯定的な意見と否定的な意見がある。分析の結果、大きく分けて、4 つの記

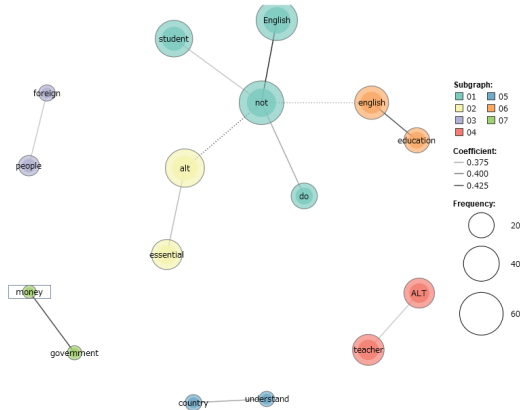


図6 ALTの在り方と活用方法に関する共起ネットワーク（非英語圏出身のALT）

述のまとめりが見出された。

一つ目の記述のまとめりは、「公立学校の英語教育のための予算をALT雇用のための人件費ではなく、日本人の英語教員の育成のために使われるべきである」という内容である。元ALTが挙げたコメントは以下の通りである。

• *In fact, I think the government should spend more money training the Japanese teachers of English -- sending them overseas, paying for English conversation classes, etc.*

• *I think money could be better spent on having Japanese teachers live overseas for one or two years and then come back with English ability. This would save money and increase the teacher's ability to teach the language.*

二つ目の記述のまとめりは、「外国人との交流促進のためにALTは必要不可欠な存在である」という内容であり、元ALTが挙げたコメントは以下の通りである。

• *I believe ALTs are essential to English education in Japanese schools. They bring fresh air to the system and allow students to learn from people from all over the world who come from different cultures and mindsets.*

• *There were English teachers with perfect accents as well, but they were few and far between. The ALT, as a foreigner, provides more interest to the subject as well as an additional reason to learn English. The ALT also helps with breaking cultural barriers and stereotypes.*

三つ目の記述のまとめりは、「英語での実践的なコミュニケーション能力を兼ね備えた人材育成のために ALT の活用が重要である」という内容である。

• *I think ALTs are essential to increasing English COMMUNICATION in Japan. Again, I feel it is a limitation that teachers are so test-focused, but having to team-teach with an ALT forces teachers to spend some part of their time on encouraging students to communicate. One of the best team-teachers I worked with was an older woman who often made mistakes in her spoken English, but even if students pointed out her errors, she was never discouraged from speaking. I saw in her students an eagerness to COMMUNICATE regardless of mistakes, which made English class relevant and interesting to them.*

• *I think they are essential when used in oral communication classes because the ALT can facilitate speaking activities and encourage students to communicate. Also, the ALT and teacher can model dialogues to the students.*

四つ目の記述のまとめりは、「英語指導方法の知識を有する ALT の育成が不可欠であり、ALTを受け入れる学校側も ALT との効果的なチーム・ティーチングを進めるための授業改善を行う必要がある」という内容であり、元 ALT が挙げたコメントは以下の通りである。

• *I think it is a nice idea, but it isn't being used effectively. Many ALTs don't have teaching degrees so they are learning how to teach when they get here and the students can smell new teachers. They don't respect them as much and the ALT is getting oriented to a whole other country along with possibly trying a whole new profession where the students don't even speak English. Japanese teachers of English (JTEs) also often let the ALT run the show and do their own thing or kind of half-pay attention to the class. It seems to be more entertainment for the students. And some JTEs just have you reading lines for students and saying if something is correct or not.*

• *I would not say, ALTs are essential, unless in the strict sense of introducing foreign people who have never seen or interacted with them before. If Japanese JTEs had the opportunity to improve their own English then the necessity for ALTs would be less. I think ALTs can be very useful but I would not say they are essential.*

## 4 考察と今後の課題

### 4.1 考察

#### 4.1.1 日本人教員との授業・授業時間外での関わり度合い

ALTと日本人教員との関わり度合いについての調査結果では、英語圏出身の元ALTと非英語圏出身の元ALTでは、授業時間内外での関わり度合いが異なる点が示された。英語圏出身の元ALTでは、日本人教員との関わり方で否定的な意見が多く、日本人教員の日々の業務の多忙さが、互いのコミュニケーション不足を引き起こしている。先行研究においても日本人教員の多忙さが、ALTと日本人教員とのコミュニケーション不足の最大の原因の一つであると指摘する(大谷 2007, p.108; 狩野・大関 2018, p.123)。さらに狩野・尾関(2018)は、日本人教員とALTとの間でコミュニケーション不足を引き起こす原因は、日本人教員の英語力不足や多忙さだけではなく、欧米文化

圏では自然に行われる気軽に声をかけることや満面の笑顔での挨拶など、コミュニケーションスタイルの違いがコミュニケーション不足を引き起こす原因であると指摘する (p.123)。

一方で、非英語圏出身の元 ALT の中で、日本人教員とのコミュニケーション不足を指摘する人は少なく、親切で協力的であったことなどの肯定的なコメントが多かった。英語圏と非英語圏出身者の元 ALT の間でのコミュニケーション形態における文化的相違が、今回の結果に表れている。大谷(2007)は、「異文化コミュニケーションの観点から、日本では以心伝心・察しに代表されるように、言葉をかかわさなくとも「読み取る」「くみとる」「察する」場面が多く」(p.109)と述べ、日本独自の文化が、英語圏出身の元 ALT がコミュニケーション不足だと感じる大きな要因の一つであると考える。相手との円滑な意思疎通をするための言語によるコミュニケーションを重視する欧米文化圏出身者だからこそ、非言語コミュニケーションを重視する日本人教員とコミュニケーションを取る際に違和感を覚えたと推測する。外国人との交流や海外留学を経験したことがない日本人教員が多いため、日本人教員も ALT とのコミュニケーションの取り方に悩んでいる可能性もある。

英語の授業を担当する英語教員だけではなく、全ての日本人教員が、異文化に関する知識に加え、異なるバックグラウンドを持つ ALT とのコミュニケーションの方法を理解する必要がある。さらに、日本人教員と ALT との関わり方について、狩野・大関 (2018) は、日本人教員は「もっとも身近で、重要な異文化コミュニケーションのロールモデルであり、先生方のその姿勢自体を子どもたちは見ている」(p.126)と述べ、Amaki (2008) は、日本人教員は ALT の前で英語の発音や文法のミスを恐れ、積極的に英語を話さない傾向があると指摘する (p.59)。日本語や日本特有の文化を理解していない ALT にとっては、日本人教員のアドバイスが必要である。橋爪(2010)は、「HRT (学級担任) が、ALT が抱えている異文化接触についてさらに理解をし、柔軟な姿勢をとっていくことは、両者の関係性を発展させていくことにことである」と日本人教員の役割の重要性を伝えている (p.38)。日本人教員に求められていることは、ALT と流暢に英語を話すことではない。相手の異なる文化的背景を理解し、英語の文法的な間違いを恐れずに積極的に英語を話



す教員の姿を生徒に示すことが重要である。その様子を見た生徒の積極的に外国人と英語で交流を図ろうとする態度の育成につなげることができると考える。

#### 4.1.2 ALTとしての仕事と生活の満足度の高さ

英語圏出身と非英語圏出身の元ALTでは、異なる視点で仕事と生活の満足度の高さに影響する要因が示された。記述回答では、英語圏出身の元ALTでは、慣れない土地での生活に適応するために最初は苦勞したが、周囲の助けもあり、充実した生活を送ることができていたと記述するALTが多かった。狩野・大関(2018)は、「自分がALTの立場に立ち、海外から一人で異国の見知らぬ土地にきて働くことを考えた場合、コミュニケーション、人間関係構築を求めるのは自然なことであり、それが無いことで感じる疎外感やストレスは大きい」(p.123)と指摘する。さらに、先行研究でも示されているように、日本人教員の多忙さが原因(大谷2007, p.108; 狩野・大関2018, p.123)で、日本人教員との関係が希薄なため、多くのALTが職場の中でも孤独を感じ、仕事の満足度も低く感じている。ALTは採用される際に日本語能力は必須条件に含まれていないため、日本人教員との円滑なコミュニケーション手段は英語となる。大谷(2007)は、「日本の学校現場では当然のことながら、殆どの情報が日本語である為、ここでもALTが理解できない、もしくは気が付いていない情報について、教員の助けが必要となる」(p.109)と述べ、今後ALTの採用数をさらに拡大した場合、日本人教員を含む周りのサポート体制の構築が課題となる。

一方で、非英語圏出身の元ALTの多くが、日本人教員や生徒との関係が良好であったため、孤独を感じたことはほとんどなく、ALTとしての仕事や生活に満足感を感じていた人が多かった。また、JETプログラム実施の趣旨の一つである異文化理解の促進のための活動に貢献したと自負している点もALTとしての仕事と生活の満足度の高さに繋がっている。その点が仕事と生活の満足度の高さが一つの要因となり、非英語圏出身者の勤務年数(表3)が英語圏出身者よりも比較的長かったことに影響している可能性がある。

#### 4.1.3 英語授業における ALT の在り方と活用方法

公立学校の英語授業における ALT の活用方法について、ALT 経験者の視点から、様々な意見が挙げられた。英語圏出身の元 ALT は、英語授業におけるネイティブ教員の在り方と活用方法を挙げ、また、改善点として ALT の曖昧な位置づけを明確にすることが重要であると述べる。さらに、日本人の英語教員との効果的なチーム・ティーチングの実施が必要であることを挙げている。石野 (2018) は、「学習者にとって異文化や外国語に触れる機会が保障される ALT の授業について、その授業自体が現場で曖昧に位置づけられている教育システムが、日本の教育文化であってはならない」(p.41) と指摘する。2020年4月からは小学校3年生から英語の授業が必修化となっているが、英語教育や言語教育の専門家ではない小学校の教員が ALT と共同授業を行うためには、ALT の位置づけをさらに明確にし、ALT を効果的に活用することが重要である。英語力に不安があるため、英語で ALT に対し指示や打合せを実施することに不安を抱えている教員も多くいる可能性があるため、日本人教員を対象とする英語研修等の機会をさらに増やすことも今後検討する必要がある。

また、非英語圏出身の元 ALT からは、英語授業を通じ、ALT が異文化理解の促進のために重要な役割を担っているため、ALT は必要であると主張する。一方で、ALT 雇用のための人件費を、日本人教員を対象とした英語指導法等の研修や海外留学のための人材育成費として使うべきであるという意見が多かった。Amaki (2008) が行った先行研究では、日本人の英語授業担当教員の英語力の低さと英語指導力の向上の必要性を指摘する ALT が多かった (p.60)。しかし、多くの日本人教員を対象に海外の大学院や語学学校等で英語教授法の取得や異文化交流を目的とした長期海外留学プログラムに派遣することは現実的に難しいと考える。そのため、学校現場で英語授業を担当する日本人教員と ALT が共に研修を受ける機会を増やし、ワークショップや研究協議等を通じ、英語を使った効果的なチーム・ティーチングの授業実践方法等を協議する機会をさらに増やす必要がある。語学力が高い日本人教員が ALT との効果的なチーム・ティーチングを必ずしも実践できるとは限らないため (Amaki 2008, p.62)、日本人教員と ALT は相互に

実践的な練習が必要である。Tsuido et al. (2012) は、ALT を対象とした調査の中で、各自治体に派遣される前の ALT 事前研修内容のさらなる充実が重要である (p.56) と提言する。JET プログラムでは、現役 ALT を対象とした業務に必要なスキル習得のためのワークショップや ALT 指導力等向上研修を実施しているが、日本人教員と共に実施している研修の事例は各自治体の取り組みを調べても少ないのが現状である。ALT 指導力等向上研修を実施する際、ALT のみを対象とした研修を行うのではなく、英語授業を担当している日本人教員も参加する共同ワークショップを実施することが必要である。互いに英語授業の工夫や改善点などに関して協議することで、ALT と日本人教員との交流の場が生まれ、ALT がより働きやすい職場環境を作ることができると思う。

#### 4.2 今後の課題

本調査では、異なる年代に ALT として勤務した経験がある外国人を対象に調査を行ない、英語圏と非英語圏出身の2つのグループに分類し、分析を行った。各グループの自由記述回答の内容からは、日本人教員との関わり度合いや ALT としての仕事と生活の満足度の高さにおいて類似点もあったが、相違点も多かった。日本人教員と ALT がそれぞれ異なる時期に英語教育の研修に参加する機会はあるが、共同で研修を実施している自治体は少ない。共同で研修に参加し、チーム・ティーチングの模擬授業や実践報告を通し、授業の打ち合わせ等の準備段階から本番までの改善点や反省点を話し合う機会等を設けることが重要である。日本人教員は多忙なためにそのような研修のための時間を確保することが現実的に難しい可能性があるが、ALT と日本人教員が共に英語の指導力養成のための研修に参加し、意見を交換する機会を確保することも効果的なチーム・ティーチングを実践するためには必要である。

また、ALT の在り方と活用方法については、小学校から高等学校までの生徒の国際交流及び異文化理解を促進する目的としての ALT は必要不可欠な存在ではあるが、ALT の役割に関する位置づけをさらに明確にする必要がある。日本人教員が、文化的にも異なるバックグラウンドを持った ALT と同じ

職場で勤務する上で、価値観や考え方の違いから生じる誤解やすれ違いもあるが、効果的にコミュニケーションを取りながら互いに信頼関係を築き、英語の授業で協働することが求められる。今後の研究では、ALT 側の意見だけではなく、ALT と共にチーム・ティーチングを行った経験がある日本人教員が考える ALT の在り方と活用方法や ALT との授業時間内外での関わり度合いについての調査を実施し、ALT と日本人教員の 2 つの側面からさらに深く分析する必要がある。

### 引用・参考文献

- 石野未架(2018)「退職を選んだ外国人指導助手 (ALT) が語るチームティーチングの課題：アクティブ・インタビューを用いて」『言語文化共同研究プロジェクト』2017, pp.33-42. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 大谷みどり (2007)「外国人指導助手 (ALT) と日本の学校文化：日本人教員と ALT 間における異文化的要因」『島根大学教育学部紀要』41, pp.105-112. 島根大学教育学部
- 奥貫妃文・カーレットルイス (2012)「労働者としての ALT (外国語指導助手) についての一考察：公教育の非正規化、外注化の観点から」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』第 9 号 2011-2012 年, pp.17-24, 大阪経済法科大学アジア太平洋センター
- 狩野晶子・尾関はゆみ (2018)「小学校 ALT から見た小学校外国語活動の現状と課題」『小学校英語教育学会誌』18 巻 1 号, p.116-131. 小学校英語教育学会
- 橋爪真理 (2010)「チーム活動としてのチームティーチングーチーム運営を円滑にするための一提案ー」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』創刊号, pp.31-42. 鳴門教育大学小学校英語教育センター
- 樋口耕一 (2020)『社会調査のための計量テキスト分析ー内容分析の継承と発展を目指してー第 2 版』ナカニシヤ出版
- 文部科学省.「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」.2013 年 12 月 13 日 ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afeldfile/2014/01/31/1343704\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afeldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf)) 閲覧日 2020 年 9 月

13日)

文部科学省. 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)」. 2017 年 ([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661\\_4\\_3\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf)). 閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)

文部科学省. 「令和元年度英語教育実施状況調査概要」. 2020 年 ([https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt\\_kyoiku01-000008761\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt_kyoiku01-000008761_2.pdf)). 閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)

「英語話せない」小学校教師の不安 ロボットも教壇に」、『日本経済新聞』、2019 年 3 月 27 日、電子版 (<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO42983720X20C19A3CZ8000/>) 閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)

Amaki, Yuki. (2008) "Perspectives on English Education in the Japanese Public School System: The Views of Foreign Assistant Teachers (ALTs)." *Educational Studies in Japan: International Yearbook*. No. 3, pp.53-63.

JET Program (The Japan Exchange and Teaching Program) 「歴史」 (<http://jetprogramme.org/ja/history/>) 閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)

Tuido, Kazuaki., Otani, Midori. & Walter, Davies. (2012) "An Analysis of Assistant Language Teachers' Perceptions of their Working Relationships with Japanese Teachers of English," 『広島外国語教育研究』 15 号, pp.49-64. 広島大学外国語教育研究センター